

[成果情報名]ブドウ無核栽培におけるアグレプト液剤の効果的な利用方法

[要約]アグレプト液剤による無核化率は、満開 14 日前の処理で高く、処理時期が遅くなるに従って低下する。また処理が早すぎても無核化率は低い。処理方法について、散布と浸漬で効果に差はないが、散布では花穂に十分薬液が付着するように処理する。

[担当]山梨県果樹試験場・栽培部・生食ブドウ栽培科・塩谷諭史

[分類]技術・普及

[背景・ねらい]

近年、種なしブドウへの消費者需要が高まり、ブドウの無核栽培が一般的となっている。しかし、ジベレリン処理だけでは完全に無核化できない品種や、樹勢や天候によって有核果が混入してしまう事例が問題となっている。そこで、安定的に無核栽培を行うため、アグレプト液剤の効果的な利用方法を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. アグレプト液剤処理は、展葉 6.8 枚（満開 21 日前）および展葉 9.7 枚（満開 13 日前）で無核化率が高く、処理時期が遅くなるにつれて低下する。また処理が早すぎても無核化率は低い（図 1）。
2. 処理方法について効果を比較すると、散布と浸漬では無核化率に大きな差は見られない。ただし散布の場合、花穂に薬液が直接かからないと効果が低下する（図 2）。
3. アグレプト液剤処理による果実品質への大きな影響は認められない（表 1）。
4. GA 1 回処理で栽培する場合、ジベレリン処理液にアグレプト液剤を加用しても、無核化率が低く、有核果混入の危険性が高いため事前に処理する必要がある（表 1）。

[成果の活用上の留意点]

1. アグレプト液剤の農薬登録は、平成 28 年 12 月現在、処理濃度が 1000 倍液（200ppm）、処理方法は①満開予定日の 14 日前～開花始期に散布（棚面全体または花房）、あるいは花房浸漬、②満開予定日の 14 日前～満開期に花房浸漬（第 1 回目ジベレリン処理と併用）であり、使用回数は 1 回となっている。
2. 例年有核果混入が認められる樹や圃場では、満開 14 日前（展葉 9 枚程度）にアグレプト液剤 1000 倍液（200ppm）を散布または浸漬処理し、ジベレリン処理液への加用処理は避ける。
3. 直接花穂に薬液がかからなくても無核化に一定の効果があるため、有核栽培の隣接圃場では、飛散しないよう十分に注意する。
4. 有核果混入には弱樹勢も大きな要因となるため、無核栽培に適した樹相に導く。

[期待される効果]

1. ブドウにおける安定的な無核栽培に寄与できる。

[具体的データ]

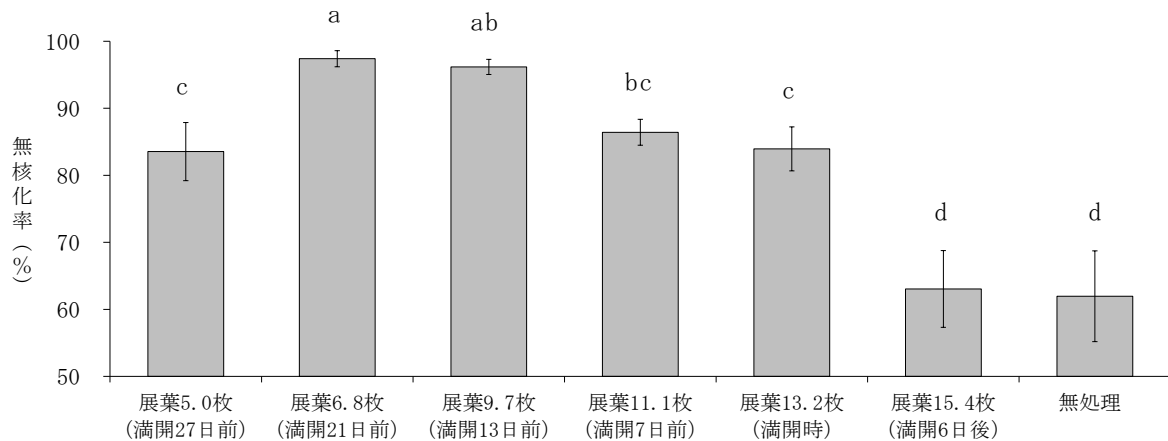


図1 アグレプト液剤の処理時期の違いが「巨峰」の無核化率に及ぼす影響(2016)
 ジベレリンによる無核化効果を除外するため、アグレプト液剤 1000 倍液のみを生育ステージ毎に処理した
 20 年生、長梢剪定樹
 垂線は標準誤差 (n=10)、角変換後の Tukey-Kramer の多重検定により、異符号間に 5%水準で有意差あり

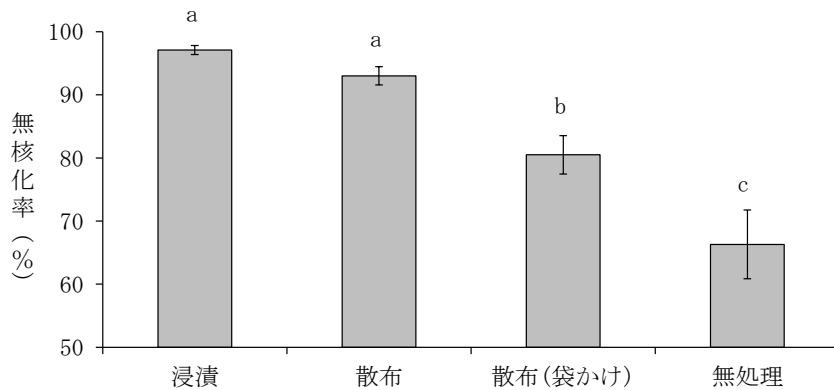


図2 アグレプト液剤の処理方法の違いが「藤稔」の無核化率に及ぼす影響(2014)
 ジベレリンによる無核化効果を除外するため、満開 14 日前にアグレプト液剤 1000 倍液のみを処理した
 散布(袋かけ)処理は、花穂を果実袋で被覆し散布を行った
 15 年生、長梢剪定樹(やや弱樹勢)
 垂線は標準誤差 (n=10)、角変換後の Tukey-Kramer の多重検定により、異符号間に 5%水準で有意差あり

表1 アグレプト液剤処理が「藤稔」の果実品質に及ぼす影響(2014~2015)²

処理方法	GA処理 ³	果房重 (g)	果粒重 (g)	糖度 (°Brix)	酸含量 (g/100ml)	着色 (C.C.)	無核化率 (%)
満開14日前浸漬		683	20.6	18.3	0.54	11.0	98
満開時GA加用浸漬	2回処理	692	20.8	18.4	0.54	10.9	91
無処理		676	21.0	18.0	0.53	10.5	83
満開3~5日後GA加用浸漬 ^x	1回処理	707	21.3	18.3	0.53	11.2	87
無処理		653	19.7	18.6	0.55	11.5	76

¹15~16年生、長梢剪定樹(やや弱樹勢)

²2回処理: 第1回目処理はGA12.5ppm+フルメット5ppm、第2回目処理は第1回目処理の10~15日後にGA25ppmで行った

1回処理: 満開3~5日後にGA25ppm+フルメット10ppmで行った

³満開3~5日後のGA1回処理におけるアグレプト液剤の加用は、登録適用外である

[その他]

研究課題名: 植物調節剤利用試験

予算区分: 県単

研究期間: 2014~2016 年度

研究担当者: 塩谷諭史、宇土幸伸、里吉友貴、小林和司